

現代のars moriendi

モーロワとモーラン

熊 沢 一 衛

1)

現代のヨーロッパ人、特にフランス人の死生観を探求する試みを、これから何回かに分けて行っていこうと思う。ここで「現代」と呼ぶものは、厳密な定義によるものではなく、ただ漠然と20世紀を指すものとする。「死生観」ということばも、まだ『広辞苑』にも採用されていないことから考えても、きちんと定義された言葉とは言い難いし、まして定着したものとは言えない。ある書物では、「生死観」というタイトルを使ってさえいる。¹⁾しかし、われわれとしては、「死生観」という言い方を採り、その定義としては、子安宣邦氏の次のような定義を適切なものとする。氏は本居宣長のことを語る中で、こう言っている。

だれにもおとずれる死とそして死後という究極的な暗部を予想しながら、あるいはそれに対応しながらたてる、なんらか現世におけるそれぞれの生を律するような観念体系²⁾

このような観念体系が宣長にはなかったと氏は続けて述べている。たしかに、『鈴屋答問録』で宣長は「死は悲しむしかないものであり、儒や仏の説は面白おかしい作り事だ」という姿勢をとっている。宣長に上記のような観念体系はなかったというのは正しかろう。では一体、われわれ現代日本人にそのような体系は存在するのだろうか。

また、本論のタイトルでars moriendiというのは、もちろん中世末期に流行した死のガイドブックのことを指している。論考を進める上で有益であるので、立川昭二氏の解説を次に掲げておこう。

15世紀の西欧社会に普及した小冊子で、死亡術 あるいは 往生術 の意。黒死病(ブラック・デス)と呼ばれる14世紀のペスト大流行の惨禍により、死と直面した人々は、ただいかに死ぬかということを考え、死に方の手引が求められ、こうした小冊子が流行した。臨終の床を囲んで、天使と悪魔が肉体を離れようとする靈魂をめぐって争うドラマを描写し、キリスト教徒としていかに死ぬか、臨終にどうふるまえばよいかを説いたものである。説得的な文章と恐ろしい光景を描いた木版画により、当時の人々の心を強くとらえた。³⁾

さて、われわれは今回、モーロワとモーランという二人の作家に即して、引用 のよ

うな「観念体系」があったのかどうか、また、あったとしたらそれはどのようなものだったのかを追求していくことにする。二人には、ars moriendiの現代版とでも言えそうな、l'art de mourir、すなわち「死に方」という短い文章があるからである。

中世末のars moriendiは立川氏の解説にあったように、臨終ぎわの病人に悪魔がさまざまな誘惑をしかけてくる設定になっていた。病人は、信仰否定、絶望、非忍耐、空しい栄光、貪欲の5つの誘惑を受けて、魂を売りわたす場面に直面する。天使がその都度出現して病人を善導する。最終的に病人は無事、キリスト教徒として死んでいく様子が版画を使ってわかりやすく人々に描き出されていた。⁴⁾ さて、1930年代に書かれた、モーロワとモーランの『死に方』はどのような死の場面を見せてくれるのだろうか。二人の短文を通して現代のars moriendiの実体が少しでも明らかになることを期待したい。

II]

二人の作家の死生観を述べるまえに、少し視野を広げて、20世紀の人間が、死を前にしたときの態度において、それ以前の人々とどのように違っているのかを見ておくことにしよう。

まず、Ph.アリエスの説が思い出される。彼は、中世では人々は死になれ親しんでいたと言う。死は「飼いならされていた」(la mort apprivoisée)ことを『ローランの歌』を例に引いて示す。一方、現代においては死は隠蔽されているとして、これを「倒立した死」(la mort inverse)と名づけている。⁵⁾

たしかに、現代では人々は病院の中で孤独に死んで行くことが多くなっている。このような孤独で悲しい人間の死に方に対して、洋の東西を問わずようやく反省の声が上がってきていることは、われわれのよく知るところである。この悲しく寂しい現代の人間の死の姿を誰よりも早く文学作品の中に書きとどめている作家がいる。リルケである。

1902年、パリにやってきたリルケの分身マルテは、パリ市立病院 hôtel-Dieu の中で人々の死に方について次のように『手記』に書いている。

この立派なオテル・ディユ病院は、ひどく古い病院で、クローヴィス王のころにも数台のベッドで息がひきとられた。今は五百五十九のベッドで息をひきとっている。これはもちろん大量生産の死というほかはない。このような大量生産ではだれも悠長に入念に死んではいられないが、それは問題ではなくて、数が問題なのである。今の世に入念な死などにあこがれる者があるだろうか。そういう者は一人もあるまい。その余裕のある金持ちでさえも、このごろは死に対して無頓着に、冷淡になり始めた。個性に富んだ死に方を願うことは、しだいに流行らなくなり始める。もうしばらくすると、個性に富む死は、個性に富む生活と同じくらいにまれになるだろう。⁶⁾

生活が既製品化して、そのことが人間の死の姿にまで及んでいくであろうことを早く

も見ぬいた証言としてこの記述は貴重である。多くの大衆の「個性をなくした死」と対照的に、マルテの祖父ブリッゲ侍従官の死は「大きな死」であったと次に回想されている。「何日間も何日間もウルスゴールに君臨して、人々に号令し要求した」「独自の死」であった。⁷⁾

このリルケの「個性をなくした死」の証言と、先のPh.アリエスの「倒立した死」とは何ら矛盾しない。おそらく、詩人が直観したものを、歴史家が調べ上げて記述したまでのことであろう。20世紀・現代の死のあり方を概観するとき、両者は互に補いあっている。

III)

A・モーロワ(1885~1976)の『死に方』l'art de mourir は1939年、第二次世界大戦の直前に発表された『ある生き方』Un art de vivre という本の末尾を飾るほんとうに短い文章である。⁸⁾

本書の内容を考える上で、これが大戦の直前に、青年に向けて書かれたということは大切なことだろう。あるジャーナリストはこうした状況と本書の内容をよく把握して次のように回想している。

そのころは世界中が不景気で、西欧には倒産、失業の暗い社会不安がおおいかぶさり、これを解決できない英・仏デモクラシーの無能さをソ連でスターリン、ドイツでヒトラー、イタリアでムッソリーニが冷笑しながら、あらゆる機会に全体主義の威力を見せびらかしていた時代だった。モーロワの本は、そんな時代にまだ自由を信ずる人間がどうして生きて行くかといった問題を、古今の人物の例や自分の経験を語りながら論じたもので、その結論は何でも「人間は仕事によって社会に参加する。しかしわれわれは仕事に没入してしまってはだめで、どこまでも自分を見失わず、各人が仕事の中でおのおのその個性に従って自分と社会との関係を調和させて行く、そこに生活の術(アート)があり、自由な人間の生きがいがある」といったようなことだった。⁹⁾

『ある生き方』とタイトルは謙虚であるが、「自由」に「思考」し、「仕事」をやりとげ「老い」ていく方法を青年に淡々と教え伝える書物であったことになる。従って「生きる」ことに重点がおかれ、「死に方」は「老い方」の末尾に短く付加されているだけであるのも十分に納得がいく。しかし、本論文の観点から見ると、興味のあることが一つ浮かび上がってくる。すなわち、現代はあの中世とは異なり、生き方がより大切であり、死を語ることもより生きることに重点がおかれるということ。さてこれからこの短い『死に方』をより詳細に読んでいき、その特徴を抽出してみよう。

モーロワはまず冒頭で、西欧の死生観を次の2つに要約している。

一つは、死は何ものでもないと信じるエピクロス派的な死に方、もう一つは死こそすべ

てであると信じるキリスト教徒の死に方である。

さらにこの要約にそれぞれこう説明を加えている。

エピクロスはいつている。「われわれにとって死は何ものでもないという考え方を
持つことが大切だ。というのも、楽といい苦といい、それらはわれわれがそうと感
じてこそのものであるが、さて死とは、いっさいの感覚がなくなることにほかなら
ない。死は何ものでもないということがわかれば、かぎりある人生に喜びの泉が湧
く。…」

キリスト教徒の死に方については次のような説明がなされる。

一方キリスト教の思想家にとって、死とは一つの通路にすぎず、そこを過ぎて行け
ば、愛した人びとに再会できるし、地上の生よりもはるかに美しい生を楽しむこと
ができるゆえに、死を恐れる必要はないのである。¹⁰⁾

これらの要約を読むとき、まずはその簡潔さに感動する。と同時に、西欧の2千年以
上にわたる人々の死に対する考え方は、もう少し複雑で多岐にわたるのではないかとい
う疑問も湧いてくる。事実、プラトンの「靈魂不滅」の思想や、ストア派、特にセネカ
の「耐えて生き、人間としての尊厳が保てぬときは自殺も容認する」という考え方はこ
こには欠落している。¹¹⁾この点に関してはまた後述することにしよう。

ここでより大切と思えることは、上記2つの死に方に代表されるような人物、作者に
よれば、聖人や英雄の立派な死に方が必ずしも奨励されていない点である。次の文章に、
モーロワの推奨する死に方、ひいては死生観が透視できる。

だが、そのような崇高さの極みを例にあげなくても、良い職人もまた最後まで仕事
をしながら、高貴な死をとげるものである。仕事に倒れる死に方にも偉大なものがある。
(下線、筆者)¹²⁾

モーロワは「仕事に倒れる死に方」を良しとし、好んでいることがこれでわかる。バル
ザックやプルーストの最後のことばをすぐあとで引用しているのは、モーロワ自身が
文筆家であったからであろう。しかし、最後のことばが引用されるのは文学者からだけ
ではなく、文法家、医者、画家、音楽家、数学者ら実に様々な職業にたずさわって、仕
事に徹して倒れていった人々の実例が手短に次々と紹介される。職業に徹して倒れてい
った人々の死に様が高い評価を得ていることに注目しなければならない。

実例にあげられた人々(コロー、ギュービエ)は、キリスト教の聖人でもなく、エピ
クロス流の考えを受けついでいるとは必ずしも思えない。おそらく、モーロワは彼らの
姿に新しい時代 近代 の「聖人」や「英雄」を見出そうとしているのではなからうか。
文章の後半で、近代のはじめにおいて新しい死生観の確立に大きな役割を果たしたモ
ンテーニュのことばが引用されているのは偶然ではなからう。モンテーニュは『エッセー』

I-20で「もし私が本を書くのを商売にする人間だったら、人間のいろんな死に様を集めて注釈した本をつくるだろう」と書いたが、これをモーロワは引用している。

当時(1930年、ロンドン)イギリスの作家バーレルとルーカスがこのような最期のことばのアンソロジーを出版したところであった。ルーカスらのアンソロジーをもとに、モーロワは、これらの人々が「卑怯未練な振るまいをせず、人間の勇氣ある姿と死にたじろがなかった実例を示している」と語る。これらの淡々とした記述の背後に働いている精神は何であろうか。おそらく、キリスト教を離れて、新しい支柱を探求していこうとする精神であり、「仕事に倒れる死に方」もこの支柱の一つだと提示しているのであろう。

最後に、ハムレットの有名な台詞、「生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ」と「死は眠りか」をめぐってのこれまた淡々とした記述がある。ここで見逃せないのは、この「恐ろしい問い」に答えがないとモーロワがいう点である。死後のことを問うことを恐ろしい問いとし、答えがないとしつつも、なお、死にたじろぐことなく(sans faiblir) 去っていった多くの人々の存在を知ることが無駄なことではないといって青年を鼓舞し、この短文は終わる。

IV]

モンテーニュを見習った「最期のことば」の引用の中から、モーロワの良しとする実例を手がかりにして彼の死生観を垣間見たところである。さらに、プラトンの「靈魂不滅」やセネカからストア派の死生観への言及が欠落している点も指摘した。死後の問題も、「恐ろしい問い」であり、「答えがない」としている点が重要であると述べた。しかし、これらの2点をそれ以上掘り下げることができなかった。

この段落IV]では、1952年発表の『わが信条』Ce que je crois を使って、以上の2点(靈魂と死後)をさらに検討してみたい。

この本の中でモーロワは自らの政治信条に関しては、はっきりとした立場を表明している。すなわち、人間の自由と権利を擁護する立場である。¹³⁾しかし、哲学的立場となると、「純粋な唯物論者でもなく、また純粋な観念論者でもない」¹⁴⁾と述べ立場をあいまいにしている。彼にとって大切なことは、「自己の今いるところを観察し、現象を確認することを通してこのあるがままの世界を支配するかである。」¹⁵⁾このような立場は、唯物論者か観念論者かという二者択一を避けた現実主義者、あるいはプラグマティストと規定できないだろうか。モーロワが『幸福論』の著者アランの生涯にわたる弟子であったこともここで思い出される。

モーロワの死生観に直接関わる箇所は本書では次に訳出するところに見出せる。

結局私は、われわれの美德や過失があので報われたり罰せられたりすることは信じない。それらは、この世で常にではないがしばしば報われたり罰せられたりしている。私は、われわれの内の何かが肉体の滅んだ後も生き続けるものかどうかについては知らない。個人の思考が、われわれの感覚の滅んだ後も存続するということは私にはあまりありえないことのように思える。なぜならば、われわれのすべて

の思考は素材として感覚的所与をもっているからである。しかしながら、記憶現象はまだよく知られておらず、永遠の夢というものは考えにくい。ともあれ、私は死を恐れない。¹⁶⁾

(下線、筆者)

最後の「私は死を恐れない」という明言は何か唐突な感じを与えないではない。しかし引用文16全体を読む限り、キリスト教徒の考える「あの世」での永遠の生命を信じるが故に、彼が死を恐れないと言うのではないことだけは確実である。また、死後の問題に関しては不可知論の立場をとっていることもわかる。これも少なくとも、プラトンやセネカの立場ではない。なぜならば、プラトンもセネカも靈魂の不滅説をとっていたからである。(『パイドン』及びルキリウス宛書簡CIIを参照)さらに、セネカ流に「常に死に備えて」って死を恐れなくなったのでもなさそうである。セネカはルキリウス宛書簡XXXでこう語っている。

死が到来したとき、それを晴れやかに受け取る者は、自分を長い間死への心構えをしてきた人にほかなりません。(.....)君は死を決して恐れなかったために、常に死のことを考えねばなりません。¹⁷⁾

モーロワが「死を恐れない」と言い切る背景には、前の段落III]で見たように「仕事に倒れていって、死にたじろぐことはない」という生き方と死に方の心構えがすでにでき上がっていたことが考えられる。さらに、引用16から敢えて推察するならば、おそらく彼はエピクロスのように、感覚のなくなった後は何も感じない故に「死はなにものでもない」¹⁸⁾という信条に傾いていたのではなかろうか。この意味では、モーロワはことばの語源的意味において、エピキュリアンに近かったと言えよう。

R.サバチエは晩年のモーロワのエピソードを伝えている。出版社で出会った際、モーロワはまだ『死の辞典』(1967年出版)¹⁹⁾ 献呈されていないことに触れたあと、「もうあれは年よりだ。こんな本を献呈すれば相手はつらい思いをするだろうと考えているだろう。」とサバチエを揶揄した。これに対して、サバチエは「100才まで生きるであろう、モーロワ様」と献辞を書いて本を手渡した。数日後して、モーロワは死去したというものである。²⁰⁾

V]

P.モーラン(1888-1976)は今日の日本ではなじみの少ない作家となったと言えよう。大正から昭和のはじめにかけて、『夜ひらく』『夜とざす』というシリーズものが訳出されたことがある程度である。ましてや、彼の『死に方』*l'art de mourir* (1932年限定出版)のことはほとんど知られていないのではなかろうか。以下では、この本を中心に、モーランの死生観を探っていくことにする。

まず、本書の構成は2部構成となっている。第一部は「死に方」と「文学にあらわれた自殺」、第二部は、セネカの書簡、特に「死と自殺」に関するルキリウス宛書簡のA

ンソロジーとなっている。第一部の2つの章は共に、古代から現代(1930年)までの人々の死に際してのことばや自殺の例を集めて紹介したものである。したがって、モーロワの場合と同様に、モーランが何を良しとし、好んでいるのかを手がかりにして彼の死生観を探っていくことになる。さらに、本書がロマン主義運動の百年祭を念頭において編まれていることも注意しておきたい。

冒頭でまた、モンテーニュのことば「もし私が本を書くのを商売にする人間だったら、いろんな死に様を集めて注釈した本をつくるだろう」が引用されている。そして、モーロワが気に入った「最期のことば」のアンソロジーを試みていったように、モーランも同じようにしていくのである。なぜこのように「最期のことば」に関心が集まるのであろうか。

ここで、カール・S・グートケの説明を要約しておくことは無駄ではなからう。彼はこの「最期のことば」の精神史 歴史のなかの主題と変奏 に挑戦している博識の人であるからである。

グートケによれば、こうした流行には3つの理由がある。第一の理由は、「文化の神髄、文化の自己確認、自己説明、自己保存とその存続」に関わるものであるからである。これを、われわれのことばで言うならば、人々は真の自己の発見と確認を「最期のことば」を通して行っているからだとなろう。第二の理由としては、「最期のことばによって死にゆく者は一種の世俗化された不死の地位につくことになる」からである。キリスト者としての不死が困難となって、人々は、世俗化された不死を真剣に求め、これが慣習化されたという理由である。第三の理由として、「最期の瞬間のミスティックとでも呼びうるものがここに加わってくる。このミスティックは生が宗教の枠組みに制約されることが少なくなればなるほどますます関心を引きおこす」ことになる。²¹⁾

この第三の理由はさらに敷衍しておく価値がありそうである。たしかに、中世においては人々はキリスト教の教義に従って最期のことばを発するのが常であった。死はいわば、パターン化されており、最期のことばは、はじめから決まっていた。グートケは続けてこう説明している。

教義が支柱としての力を失えば、死にゆく者は言うべきことがわからなくなる

すると彼の言うことは俄然おもしろくなり、オリジナリティを増し、予見可能なものでなくなってくる。²²⁾

こう考えてくると、モンテーニュは近代のはじめに、早くもこの予見不可能となった人々の最期のことばに興味をもった最初の人であったことになる。換言するならば、人々は近代になってはじめて「いろんな死に方」ができるようになったことにもなる。

しかし、『死を前にした人間』でPh.アリエスが示しているように、人々の死に直面したときの態度が15世紀から16世紀にかけて急変したわけでもない。実際、アリエスはモンテーニュを完全に無視している。²³⁾ また、『最期のことば』のアンソロジーもルネサンスから急に多く出版されだしたわけでもなかった。²⁴⁾

モーランは、しかしながらこの「いろんな死に方」が今日(1930年)またしてもむずかしくなってきたことに気づいている。人々がまた同じような死に方をして、先のモンテ

ーニュのことばがほとんど意味をもたなくなっている。「死に方のわからなくなった人は不幸だ」というセネカのことばを引用して、現代の死を批判している。²⁵⁾これは、先に述べたリルケの「個性をなくした死」とどこか通底する。

モーランに好まれている「最期のことば」はわずかにフォントネルのそれのみである。「辛いですか」と問う医者に、「生きていることの辛さしか感じない」とフォントネルは答えたそうである。²⁶⁾ 18世紀に100才 正確には99才と332日 までただ長い

生を耐えて生きていた人への奇妙な共感に、モーランの真骨頂を見る思いがする。

では「死に方のわからなくなった不幸」な現代人はどうすればよいのか。これに対してモーランは、もはや最期のときに沈黙するしかないと言う。何の秘密も明かさず黙々と死にゆくのがよいと言うのである。モデルとしては「狼の死」la mort du loupが選ばれている。

この「狼の死」は当然ヴィニーの詩を思い浮かべて述べられているだろう。この文章がロマン主義運動百年祭を念頭において書かれていたことともここで連動する。ヴィニーの詩『狼の死』には次のような詩句がある。

Gémir, pleurer, prier est également lâche,
Fais énergiquement ta longue et lourde tâche,
Dans la voie où le Sort a voulu t'appeler,
Puis après, comme moi, souffre et meurs sans parler
呻くも、泣くも、祈るもひとしく卑し。
「運命」のおん身を呼ぶを欲せし道にて、
永くして重きつとめを雄々しく果せよ。
かくて後にわれのごとく、苦しみて死せよ、
語ることなく。²⁷⁾

ヴィニーのストイックな「死に方」への共感からモーランがセネカのそれへ移行していくのは極めて自然である。セネカの死生観について、茂手木元蔵氏はこう述べている。

世界の万物が必然的法則に従って生成することを認め、人間の死もこの必然的法則に支配される一つの事件として黙々と自然に従って生きることを説く。²⁸⁾

モーランのセネカへの傾斜 モーロワには全く見られなかった と本書の第二部がセネカのルキリウス宛書簡のアンソロジーとなっていることとは密接な関係がある。書簡I、IV、XII、XXIV、XXX、XXXII、XXXVI、LXX、LXXVII、CIIが仏訳されて引用され、これらの書簡のことばがモーランの信念を代弁する仕組みとなっている。

VI]

この段落ではセネカの書簡LXX「自殺について」とモーランの『死に方』第一部後半

の文章「文学にあらわれた自殺」とを比較検討してみたい。書簡LXXは友人ルキリウスに「死ぬべき適時」について語っているものである。次に引用する箇所がその要点であろう。

お分かりのことと思いますが、そのような人生にいつも縋り付いてはいけません。すなわちただ生きることが善ではなく、良く生きることが善です。ですから、賢者は生きねばならぬ限りは生きますが、生きることができる限り生きるのではありません。(……………)賢者は常に人生の量ではなく、質のことを考えます。もし多くの煩わしい、平静を乱す事件が起るならば、そこから身を退きます。それを最後の不可避な場合に行うばかりではなく、運命の動向が怪しいと思われ始めるやいなや行います。(下線・筆者)²⁹⁾

これはセネカの自殺容認の文章と一般には受けとられている。しかし、下線部の「最後の不可避な場合」という条件に注意しなければならない。また、「運命の動向が怪しいと思われ始めるやいなや」というくだりは、ネロの命令が下って、いち早く自害したセネカ自身の行動を予告していて印象的である。

一方、モーランの「文学にあらわれた自殺」は、古代からの実例も掲げられてはいるが、中心となるのは第一次大戦後の自殺例である。それらはロマンチックな自殺と呼ばれ、無償の自殺、物質的な理由がとくにない自殺である。『悪霊』のキリロフにはじまり『恐るべき子供たち』(1929年)の自殺例が上がっている。そしてこれらの文学作品中の自殺例をモーランは、動物にはなく「人間の専有物であり栄光を形成するもの」ともち上げる。

セネカは、ソクラテスや小カトーの自殺を「賢者」の自殺として絶賛した。モーランは「無償の自殺」を人間の栄光とまで評価した。後者の自殺の美化は、アリエスの言う「汝の死」にあたり、ロマン主義の時代に流行し、第一帝政以来すたれていたが、ここ第一次大戦後に再び流行しだしたものである。モーランはこの社会的現象に好意的に対応していることになるが、その理由の社会的分析は行っていない。

こうした流行の理由はなによりもまず社会学的に分析されねばならないだろう。つまりこの時代は今ではよく知られているように、B.クレミウのいう「不安と再建」の時代であったのである。人間の理性や合理的精神で築かれてきた西欧文明が、第一次大戦で粉々に散ってしまった。人々は価値の基準を見失ってしまい、自己を支えるべき何物も見出せないでいた。そのような状況で自殺の美化が再燃したと見るべきだろう。クレミウはこう分析している。

一九一八～一九三〇なる期間は超現実主義と逃避との期間であると同時に、文学史上、人格分解の期間として伝えられるであろう。一九三〇年はこの期間の極限を画していて、再建の意志が想像力に訴えてこの分解を克服する序曲を奏している年かも知れぬ。

(下線・筆者)³⁰⁾

モーランが作家として活躍していたのも、また『死に方』が限定出版されたのも、この「人格分解」の時代であり「再建の意志」の序奏の時であった。一体、彼はセネカ流にこの時期を「再建」に向けて耐えて生きていたのであろうか。たしかに、「狼の死」を推奨していた点から考えて、その姿勢だけはあったと認めねばなるまい。しかし、ある文学史の本が語っている次のような評価も正鵠を得ていると言わねばならない。

読者大衆は日常生活からの安直な逃避を求めていたらしい。そのあらわれとして、一方には外交官作家 Paul MORAND (1889-1976) の、たとえば外国都市の横顔を描いた旅行記風の作品があり、読者は居ながらにして海外旅行が果せた。他方には作家モーロワ André MAUROIS (1885-1967) が手がけて成功した一連の伝記物がある。³¹⁾

1971年5月5日、ラジオのインタビューを受けた際、モーランは上機嫌で往事(時)を語り、近作の『ヴェニス』のことを述べている。そのなかで、われわれの関心をひいたのは次の部分である。「私は陽気なペシミスト、悲しいオプティミストである。死に対する恐れはない。生きてきたこれまでの人生に非常に満足している。」³²⁾ 83才まで生きて、自分の人生に満足できている人はおそらく死を恐れないものであろう。ミッテラン大統領が死の直前、信仰を持った人ほど平静でいられるのだろうかと問うたとき、カウンセラーのエヌゼル女史はこう答えたそうである。

信仰ではなく、その人の背景にある人生の豊かさがあって初めて、人は死の手に身をゆだねることができるのです。³³⁾

これは、モーランの晩年の心境を察するとき参考になることばである。

VII]

結論を述べるときにきた。モーロワとモーランの『死に方』を通して見えてきたものは、現代のars moriendiが人々の「最期のことば」のアンソロジーとなっていることであつた。そして、ここに一種の世俗化した不死への願望を読みとることも可能である。

モーロワはエピキュロス派に近い考えにもとづき、「仕事に倒れていった」人々の最期のことばを好んで引用していた。生涯アランの弟子として生き、師のもっていた「故意の楽天主義」を継承していたのであろう。実際『アラン』の中でモーロワは師の教えの一端を紹介している。

何ごとも不可能でない、とアランは言う。現在の行動に自分を投じたまえ。そうすれば人間の力の、君本来の手段の極限において、君は君の望むものをかち得るだろう。³⁴⁾

彼のars moriendiは困難な時代に青年に希望を与え、勇気を鼓舞し生きぬくことを勧めていた。

一方、モーランはストア派の死生観に傾斜していきセネカの「死と自殺」をめぐる書簡のアンソロジーを作成した。彼もまたモンテーニュのことば通りに「最期のことば」を集成したが、「いろんな死」が再び困難となってしまった時代を見ぬいていた。わずかに、フォントネルの「永く生きている辛さ」に共感して現代ではただ黙して死す「狼の死」を推奨するにいたった。

二人とも「不安と再建」の時代に文学的デビューを果し、第二次大戦を生きのびて、長寿を全うした点は共通している。

注]

- 1) 宗教思想研究会編著『日本人の生死観』(大蔵出版、1972)
- 2) 田村 他編『日本における生と死の思想』(有斐閣、昭52)p.225
- 3) 『平凡社大百科辞典』1 p.603
- 4) A. Tenenti : La Vie et la Mort à travers l'art du XV^e siècle (A. Colin, 195)p.98 ~ p.120
- 5) Philippe Ariès : L'Homme devant la mort (Seuil, 1997)
及び、成瀬駒男訳『死を前にした人間』(みすず書房、1990)
- 6) リルケ作、望月市恵訳『マルテの手記』(岩波文庫、1994)p.12 ~ p.13
- 7) 同上書 p.16 ~ p.17
- 8) André Maurois : Un art de vivre (Presses Pocket, 1973) 254頁中 l'art de mourir はわずかに3頁である。初版は(Plon、1939)である。なお、中山真彦訳『私の生活技術』(講談社、1978)と『人生をよりよく生きる技術』(講談社文庫、1990)の訳文を以下で利用させていただく。
- 9) 1975年1月4日付「朝日新聞」の小島特派員の記事の一部
- 10) 中山真彦訳(講談社文庫)p.244
- 11) 泉 他編著『西洋における生と死の思想』(有斐閣選書、昭58)参照
- 12) 中山真彦訳(講談社文庫)p.245
- 13) André Maurois : Ce que je crois (Grasset, 1952) p.31
- 14) Ibid. p.19
- 15) Ibid. p.12-p.18
- 16) Ibid. p.41 ~ p.42
- 17) セネカ著、茂手木元蔵訳『道徳書簡集』(東海出版界、1992)p.108 ~ p.109
- 18) 出 隆・岩崎允胤訳『エピロクス 教説と手紙』(岩波文庫、1996)p.75
- 19) Robert Sabatier : Dictionnaire de la Mort (Albin Michel, 1967)及び窪田・堀田訳『死の辞典』(読売新聞社、1991)
- 20) M. Bisiaux, C. Jajolet : 40 écrivains parlent de la mort (Horay, 1990) p.240

21) カール・S・グートケ著、信岡資生訳『往生際の名台詞』(三省堂、1995)p.66～p.90 なお原題はLetzte Worte (C.H. Beck. 1990) である。

22) 同上書 p.78

23) アリエス著、成瀬訳、前掲書、p.259以下参照。

24) グートケによれば(p.137)出版が多くなるのは1860年代に入ってからである。

25) Paul Morand : l'art de mourir avec les lettres de Sénèque sur la mort et le suicide (l'esprit du temps, 1992) p.9 もちろん初版は(Cahiers libres 1932)である。

26) Ibid. p.14

J'aime entre toutes cette phrase de Fontenelle à son médecin : 《Je ne sens autre chose qu'une difficulté d'être》.

27) ルネ・ラルー著、小松 他訳『フランス詩の歩み』(白水社、1995) p.106

28) セネカ著、茂手木訳、前掲書 p.789～p.795参照

29) 同上書、p.250

30) B.クレミウ著、増田篤夫訳『不安と再建』(小山書店、昭26)p.64

31) 饗庭 他編著『新版・フランス文学史』(白水社、1992)p.266

32) Radioscopie de Jacques CHANCEL Paul Morand 5, 05, 71 より

33) マリー・ド・エヌゼル著、西岡訳『死にゆく人たちと共にいて』(白水社、1997) p.215

34) アンドレ・モーロワ著、佐貴訳『アラン』(みすず書房、1994) p.142～p.144

本論文執筆中に神沢栄三先生がなくなられた。中世フランス文学の研究と翻訳に優れた業績を遺された。筆者も『ローランの歌』の名訳をいただき、Tenentiの貴重な本をお借りした。ここに感謝の気持ちを表わしご冥福をお祈りする。